



Topic

「大学入学共通テスト」の実施方針が確定！

P.02-03

2020年度は部分的な改革でスタート。本格移行は2024年度！

私大においても
思考力や主体性を問う選考へ

国語 数学

記述式問題の導入が確定

英語

民間資格・検定試験も
活用する方針

P.04

News Hotline

- 1 「共通テスト」に先んじて、私大では英語の民間試験活用が進む
- 2 “飛び入学”対象学部が拡大傾向に
- 3 工学系分野でも横断型の学部・学科を設置へ

文部科学省は、大学入試センター試験（以下：センター試験）を2020年1月の実施を最後に廃止して、2021年1月から「大学入学共通テスト（以下：共通テスト）」に移行することを公表しました。移行後の方針は、従来検討されてきた通り、国語と数学に記述式問題を導入。英語では「読む」「聞く」「話す」「書く」の4技能考査を目的として、民間の資格・検定試験を、大学入試センターの作成するマークシート式の試験と併存させます。さらにその先の2024年度からは、高校の学習指導要領の改訂に対応した『歴史総合』など、新たな科目試験の実施も検討されることになりました。

2020年度より大学入試が新たなステージへ 知識偏重から、 思考力や判断力、表現力重視に

センター試験が廃止に至った背景には「社会環境が目まぐるしく変わりゆく現代は、知識を蓄えるばかりではなく、自分で問題を発見して、それに対する答えを導き、そこから新しい価値を生み出す力が重要になる」という考えがあります。こうした時代に役立つ力を測るものの一つが、2020年度からセンター試験を刷新して実施される“共通テスト”です。したがって、該当する受験生たちはあらゆる学びの場において、その意図を踏まえた学習が求められます。

独立行政法人・大学入試センターのホームページでは、国語と数学について「共通テスト」記述式問題のモデル問題例が公開されており、大枠の傾向をつかむことができます。その詳細については、早い段階で、実際にアクセスしていただきイメージをつかんでいただくことをお勧めしますが、ここでは“出題のねらい”をкаいつまんで紹介します。

国語については「提示された複数の資料や、それぞれの立場の主張を正確に読み取る力や、出題内容に対して的確に表現する（書く）力」が問われています。数学については「これまでの試験と比べて、何を変数とするかを判断し、関数としてどのように処理して答えに導くか」という思考力が問われています。

他方、英語については“民間の資格・検定試験”を活用するということが未確定要素も多く、現段階ではモデル問題例は提示されていません。

よって次ページ以降では、“共通テスト”移行に向けた大学入試のスケジュール等に加えて、予想し得る主な“民間の資格・検定試験”について触れていきます。



2020年度は部分的な改革でスタート。 本格移行は2024年度!



現在の中学3年生から 新テストの対象に

2020年度に施行することが決定した「共通テスト」。大きな変化は、国語・数学における記述式問題の導入と、英語における4技能考査への転換や民間資格・検定試験の活用です(詳細は3面を参照)。試験内容の変更はもちろん、運用や採点における体制変化も大きいことからセンター試験導入以来の大改革

ともなわれています。また、今年度からは試験的に「プレテスト」を実施することが決まっており、その動向が注目されています。

新テストの対象となるのは現在の中学3年生以降。これまでの「センター試験」とは異なる方針の「共通テスト」にまだ対応方法が確立していない中で、受験しなくてはなりません。また、センター試験最後の世代となる現高校1年生にとっても、浪人した場合に学習スタイル

が大きく変わるといってプレッシャーがかかります。

「共通テスト」の本格的な改革は、 現在の小学5年生以降

ただし、2020年度からの「共通テスト」は、これまでの「センター試験」の傾向も大きく残した状態での部分的な改革にすぎません。出題教科・科目も現行のセンター試験と同様の30科目で実施することが予定されています。本格的な改革はさらに先、現在の小学5年生からが対象となる2024年度に待ち受けています。

この時には新学習指導要領(※)に則り出題教科・科目ともに簡素化され、世界史と日本史を統合した「歴史総合」が登場する予定です。また、地歴・公民や理科についても記述式の導入が検討されており、英語は民間試験に全面移行するなど、さらに大きな変革を実行するべく、検討が進められています。加えて、2024年度以降の新テストでは運用面についても大きく体制を変えることを目指しており、コンピューターで受験できる「CBT方式」を導入し、年に複数回受験して一番よい成績を活用できるように仕組みも目指しています。

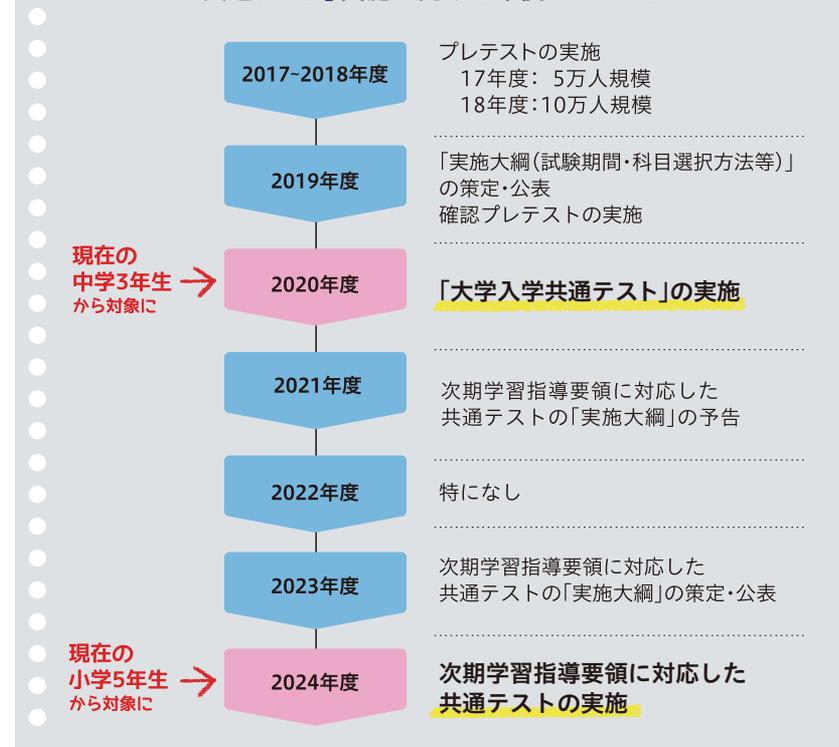
具体的な方針については2021年度に策定・公表される予定ですが、ほとんどの科目において思考力や判断力・表現力が問われるため、知識の習得に終わらない、自ら学び、考え、発信することを癖づける教育が必要になります。昨今、

調べ学習やディスカッション、プレゼンテーションといった、子どもが主体的に学ぶ「アクティブ・ラーニング」が注目されていますが、その背景にはこうした高大接続改革を中心とした教育改革の流れがあります。中学受験にも大きく影響を及ぼすことが考えられ、教育現場や保護者のマインド・チェンジが求められそうです。

※次期学習指導要領は、「子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成する」ことを目的に、「知識及び技能の習得と思考力、判断力、表現力等の育成のバランスを重視」した教育体系に改訂することが確定し、今年3月に公示されました。さらに、「道徳教育の充実や体験活動の重視、体育・健康に関する指導の充実により、豊かな心や健やかな体を育成」することも標榜されています。次期学習指導要領に則った教育への全面移行は、幼稚園では2018年度から、小学校では2019年度から、中学校では2020年度から、高等学校では2021年度から(年次進行で実施)と予定されています。ただし、それまでも移行期間として、現在のカリキュラムを部分的に変更することが通知されています。



「共通テスト」実施に向けた今後のスケジュール



私大においても思考力や主体性を問う選考へ

私大の個別選抜試験にも 記述式問題導入を推奨

「共通テスト」への移行は、国公立大受験を目指す人にとっては見逃せない情報である一方、私大を目指すのであれば、あまり深刻にならなくても良いと考える人もいるかもしれません。しかし、この改革の大本にあるのは、日本の教育全体の方針転換を目指した学習指導要領の改訂です。当然、「共通テスト」だけではなく、私大にも「共通テスト」利用入試がありますし、各大学の個別選抜試験も変更が検討されています。

例えば記述式問題について、文部科学省は「共通テスト」だけではなく、各大学の一般入試においても導入を推奨しています。また、AO入試や推薦入試においては、小論文、プレゼンテーション、教科・

科目に関わるテスト、共通テストのいずれかを活用することが必須化されました。「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」をより評価すること、推薦であっても一定の「知識・技能」を身につけていることを推奨するための変更です。

一般入試でも調査書を活用し、 多面的な評価へ!?

さらに、一般入試のさらなる改善策として、調査書や志願者本人が記載する資料等を積極的に活用するように促す方向で議論が進められています。2020年度から順次導入される予定で、2024年度以降は、各大学で取り組みが深化されるよう、制度設計・体制整備の検討が進められています。

調査書とは学習態度、健康状況、学校

生活などについて記したもので、現在主にAO入試や推薦入試で用いられています。それをさらに充実するべく、エッセイや面接、ディベート、集団討論、プレゼンテーション、各種大会や顕彰等の記録、総合的な学習の時間などにおける生徒の探求的な学習成果などまで、学生生活における様々な記録を多面的・総合的に深く記し、一般入試における選考にも活用することを検討しているのです。

各大学が調査書をどの程度重視し選抜の評価に加味するのかはまだ分かりませんが、受験生にとってはこれまでのように受験対策だけをしていれば良い、という状況ではなくなる可能性があります。大学はもちろんのこと、その先にある社会との繋がりも見据え、中学・高校生活全体を含めた、自分自身の歩むべき道を考える力も問われることになるのです。

平上先生の 見解・アドバイス



身につけるべき「学力の3要素」の

三つ目に「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」が位置づけられ、具体的な新テストの変更点として国語・数学の記述式の問題の導入が予定されています。

中学受験グローバルでは当初から、対面授業による直接のやり取りを通して解ける楽しさを積み重ねることで、生徒たちの「知の力」を育てることを標榜してきました。

たとえば国語では、講師、生徒双方が「背景知識」を共有することでより実感の伴った文章理解に導く、生徒たちの能動的な「気づき」を促して論理的思考を育成する、授業中にリアルタイムで生徒の答えを添削し、テストでも記述問題を多く取り入れる、などをしています。

新テストはまだ不確定な部分もありますが、未来に向けて生徒たちの真の学力を養成するという目的は共通しているの、生徒たちには十分な対応力が備わるものと思います。

(中学受験グローバル: 広報担当)

国語

数学

記述式問題の導入が確定

これまでの国語・数学とは
全く異なる問題が登場

国語と数学では、2020年度の「共通テスト」から、それぞれ3問程度の記述式問題を導入することが決定しました。ただし、注目は「記述式」という解答方法の変更よりも、その問題内容にあります。

例えば、実際に大学入試センターが発

表した国語の「モデル問題例」には、「(架空の都市の)景観保護ガイドラインのあらまし」や「駐車場使用契約書」が図表とともに取り上げられています。さらには、ガイドラインを確認して自分たちの考えをぶつけ合う親子の会話や、契約書をもとにした駐車場担当者との電話のやり取りなども示されます。

また、数学のモデル問題例の一つでは、

ある公園整備計画を題材として取り上げられています。計画の全容や設置する銅像などの条件をもとに、銅像が最もよく見えるスポットを算出するという設問です。

国語も数学も、まさに社会に出てからビジネスや生活で直面する問題解決の場面を想定した問題が設定されているのです。

学んだ知識を

いかに活かすかを問う問題へ

国語では問題で示された図表や状況を読み取った上で、問題を解決するためには次に何を当事者に質問すべきか。また、自らはどのような意見をぶつけるべきかを考え、論述させるような設問が準備されています。これまでの国語(特に現代文)のテストでは、問題文の理解や言葉の知識を尋ねてきました。しかし「共通テスト」の記述式問題では、与えられた場面を理解し、複雑な情報を読み取り解釈した上で、何をすべきか、自らの言葉で論理を説明する力が求められています。

また、数学の場合、現行のセンター試験では問題解決までの構想から結論に至るまでのプロセスが文脈から読み取れるようになっている一方で、このモデル問

題例では、問題を解決するためにどのような数学的な根拠・思考が必要になるのかを自ら考え、導き出す必要があります。

いずれも定められた条件の中で“正解は何か”を正確に求めることよりも、“どのように解くか”を考え、工夫させる問題になっていることが現行との大きな変化です。「記述式問題」と聞くといかに説明するかという表現力に意識が向きそうですが、それ以前に問題をどのように解決すべきかを考える思考力・判断力と、問題を解き明かすための基礎的な知識がより重要になります。

吉田先生の
見解・アドバイス

共通テスト「国語」のマークシート部分では、現行センター試験と同じように、現代文・古文・漢文の読解問題が出題される予定です。ただし、先日公開されたモデル問題には、従来とは傾向の異なる問題も見られました。文章構成の理解、文法的表現の鑑賞などの応用的読解がこれまで以上に期待されています。古文の大問では、古文の文章とそれを鑑賞した現代文の文章を合わせて読ませる形式になっていました。文章量が多く、時間制限の厳しい中で、複雑な文章内容・設問指示を理解しなければなりません。日頃から長く、硬質な文章を読み慣れている必要があります。

(大学受験クノープル:国語科担当)

国語・数学とも3問程度の記述式問題を導入

出題範囲 国語総合(古文・漢文除く) ※マークシート式には古漢も出題

素材

- 論理的な内容を題材にした説明、論説
- 新聞記事・社説、会議等の記録、契約書や法令の条文、公文書、実務的な文章(取扱説明書、報告書、提案書等)
- 統計資料(図表・グラフ等)を用いた説明

問題数 文字数80~120字程度の問題を含め3問程度
マークシート式と記述式の大問は分けて出題

時間 マークシート式と合わせて100分程度

国語

出題範囲 数学I、数学I・数学A(出題範囲は数Iの内容)

素材

- 数学的な事象を扱ったもの
- 日常生活、社会事象を扱ったもの
- 図表やグラフなどを用いて考えたことが解答の前提となる問題

問題数 3問程度
マークシート式と記述式の問題が混在

時間 マークシート式と合わせて70分程度

数学

出所 文部科学省「高大接続改革の実施方針等の策定について」(平成29年7月13日)

英語

民間資格・検定試験も活用する方針

2023度までは、
民間試験と「共通テスト」を併用

「共通テスト」の英語は、かねてから現行の「センター試験」が「読む」「聞く」の能力を中心に選択式で問うものであるのに対し、「話す」「書く」を含めた4技能を評価するテスト方式が模索されてきました。そして、今年7月に発表された実施方針で、民間事業者の資格・検定試験を活用することが正式決定されました。当初は、一つの資格・検定試験を大学入試センターが選定することも検討されましたが、実施案では“複数の事業者”をセンターが認定し、その試験結果及びCEFRの段階別成績表示を、要請のあった大学に提供することになりました。

また、本格実施となる前年の2023年度までは民間の資格・検定試験だけではなく、「共通テスト」においてもこれまでの「センター試験」と同様のマークシート式の英語試験を併用することになりました。受験生の混乱を避けるための併用という決断ですが、受験生にとってはどちらに合わせた学習を進めるのかという判断が必要になりそうです。

どの民間試験を目指すのか、
受験者ごとの戦略が鍵

また、文部科学省の指針では、「受験

者の負担を配慮して、できるだけ多くの種類の資格・検定試験を対象として活用するよう各大学に求める」とも示されている通り、選考に用いる資格・検定試験は全大学が一律に同様ではなく、大学によって異なる可能性もあります。

さらに、大学受験に活用できる民間試験結果は、高校3年の4~12月に受けた2回の結果のみと確定。受験生は、資格・検定試験の出願時にセンターへ自分の

成績を送付する必要がありますが、複数種類・複数回受けた試験のうち、成績の良かった2回分の結果を選択して送付することはできません。

つまり、志望大学がどの資格・検定試験を対象としており、CEFRにおいてどのレベルまでを求めているのか情報を収集することが第一歩となります。さらには、そのランクを獲得するためには、対象とされている資格・検定試験の中からど

れを受験すべきなのかを、高校2年の間に判断しなければなりません。

現在検討されている資格・検定試験は、英検やTOEICなど様々な種類があり、4技能の中でどこに重点を置いているかもそれぞれ異なります。土台となる英語の基礎学力アップが最重要課題であることはもちろん、高校3年になってから慌てないためにも、各々の試験の概要を事前に把握しておくことも必要です。

CEFRとは?
セファール

CEFRとはCommon European Framework of Referenceの略で、多言語が行き交うヨーロッパにおいてどの言語でどれだけの語学力(コミュニケーション力)があるのかを測る物差しと考えて良いでしょう。CEFRは言語の熟達度を、A1、A2、B1、B2、C1、C2の6レベルに分けて評価します。ここでは、各資格・検定試験とCEFRのスコアを図で解説します。

各資格・検定試験とCEFRスコアの対照表

| CEFR | Cambridge English | 英検 | GTEC CBT | GTEC for STUDENTS | IELTS | TEAP | TEAP CBT | TOEFL iBT | TOEIC / TOEIC S&W |
|------|-------------------|------------------|-----------|--------------------------|---------|---------|----------|-----------|-----------------------------------|
| C2 | CPE (200+) | | | | 8.5~9.0 | | | | |
| C1 | CAE (180~199) | 1級 (2630~3400) | 1400 | | 7.0~8.0 | 400 | 800 | 95~120 | 1305~1390 L&R 945~ S&W 360~ |
| B2 | FCE (160~179) | 準1級 (2304~3000) | 1250~1399 | 980 L&R&W 810 | 5.5~6.5 | 334~399 | 600~795 | 72~94 | 1095~1300 L&R 785~ S&W 310~ |
| B1 | PET (140~159) | 2級 (1980~2600) | 1000~1249 | 815~979 L&R&W 675~809 | 4.0~5.0 | 226~333 | 420~595 | 42~71 | 790~1090 L&R 550~ S&W 240~ |
| A2 | KET (120~139) | 準2級 (1284~1800) | 700~999 | 565~814 L&R&W 485~674 | 3.0 | 150~225 | 235~415 | | 385~785 L&R 225~ S&W 160~ |
| A1 | | 3級~5級 (419~1650) | ~699 | ~564 L&R&W ~484 | 2.0 | | | | 200~380 L&R 120~ S&W 80~ |

News Hotline

1 「共通テスト」に先んじて、私大では英語の民間試験活用が進む

高大接続改革の一環である「共通テスト」において、英語で民間の資格・検定試験を導入することになったのは、本誌既報の通りです。しかし、文部科学省の取り組みに先んじて、同様の取り組みを既にスタートさせる私大が増えています。

早稲田大学もその一つです。文化構想学部と文学部では既に2014年度から英検で準1級以上を取得した者には英語の試験を免除する制度を導入していましたが、今年度は該当試験をさらに拡大。「TEAP」「IELTS」「TOEFL(iBT)」も導入する方針を発表しました。

この決断は「2032年の創立150周年までに全学部の授業の半分以上を外国語で実施し専門分野を外国語で理解・表現できる人材を育てる」というビジョンの一環であり、同様に外国語を重視した教育方針を掲げる大学・学部では、入試における民間試験活用が進んでいます。

様々な試験が活用されていますが、最近特に注目を集めているのが、早稲田大学も導入した「TEAP」です。

「TEAP」とは「Test of English for Academic Purposes」の略称で、公益財団法人日本英語検定協会が実施しています。その名の通り大学で学習・研究する際に必要とされる英語力(英語で資料や文献を読む、講義を受ける、意見を述べる、文章を書くなど)をより正確に測定することを目的としており、上智大学との共同開発によって生み出されました。

実用性を意識した「読む」「聞く」「書く」「話す」の4技能を測るテストであることはもちろん、評価方法に素点だけではなく、世界的な英語レベルの指標「CEFR」に対応したランクを表示する点も評価されており、導入する大学が増加。今年度は73大学で採用されることが決まっています(2017年8月3日時点)。また、点数の認定期間が2年間あるため、高校2年生時に取得した点数を大学受験で活用することが可能な点も、受験生にとって利用しやすいポイントで、今後も利用者増が見込まれています。

実際に法政大学では、外部試験利用2年目の昨年度から「TEAP」も導入したとこ

ろ、対象となる学部への志願者数が増加したと言います。

民間試験はそれぞれ特徴が異なる上、大学・学部ごとに採用している試験が異なるための確な情報収集が必要になります

が、上手に活用することができれば、受験生にとっては試験前の追い込み学習や試験当日の負担が軽減され、複数大学受験や学内併願もしやすくなるというメリットがありそうです。

「CEFR」におけるA2～B2までを4技能ごとに表示

| | A1 | A2 | B1 | B2 | C1 | C2 |
|------------------------------------|----|---------------------------|--------------------|----|--|----|
| | 初級 | TEAPで測定 | | | 上級 | |
| Reading test 英語で資料・文献を読む | | マークシートによる 択一選択方式(70分) | | | コンピュータによる択一選択方式 (ドラッグ/ドロップによる解答あり)(80分) | |
| Listening test 英語で講義を受ける | | マークシートによる 択一選択方式(約50分) | | | コンピュータによる択一選択方式 (40分) | |
| Writing test 英語で文章を書く | | | 解答用紙への記入(70分) | | コンピュータの解答エリアへの タイピング(50分) | |
| Speaking test 英語で意見を述べる | | | 1対1の面接方式 (約10分) | | Facilitatorとのオンライン面接方式 (30分) | |

2 “飛び入学”対象学部が拡大傾向に

千葉大学は、17歳から大学で学ぶ“飛び入学”のプログラム実施分野を、2019年春から「生物学」の分野にも拡大することを発表しました。同大学は飛び入学制度の先進校で、初めて導入したのは1998年です。以降、現在までに「物理学」「化学」「工学」「植物生命科学」「人間科学」関連の5分野で飛び入学を実施してきました。そして、今回の「生物学」関連分野での飛び入学受け入れは日本初の試み。飛び入学プログラムでは教員とマンツーマンに近い環境での指導や海外研修も実施されており、スペシャリストを育成する教育環境の整備に積極的に取り組んでいます。

これまでの日本の大学では海外に比べて飛び入学制度の少なさが指摘されてきました。しかし近年、千葉大学と同様に全国で少しずつ飛び入学の門戸を広げる動きが出始めています。

2014年度には日本体育大学が体育学部で飛び入学を開始。スキージャンプの高梨沙羅選手がこの制度を利用して入学したことで注目を浴びました。2016年度には東京藝術大学が音楽学部で、京都大学が医学部で飛び入学を導入し、現在は全国の7大学で実施されています。これまでは理工系学部や音楽系学部での取

り組みが目立ちましたが、近年の日本体育大学や京都大学の取り組みは、飛び入学の分野を広げて日本の教育界を活性化する意味でも重要な取り組みです。

京都大学が飛び入学制度を導入した背景には、2016年度からスタートした「特色入試」の考えがあります。これまでのように各科目で高得点を取る“優秀な学生”ではなく、特定の分野に偏っていても卓越した能力と高い学習意欲を発揮する「とんがった人材」を求めているのです。

京都大学に限らず、飛び入学にはもちろん高い学力が求められますが、いずれも通常の大学受験のように複数の科目で総合的な成績が求められるものではありません。全ての子どもたちが一律に総合的な学力を伸ばすのではなく、何か一つの突出した能力を高めることができる教育環境を充実させるためにも、今後のさらなる広がりが期待されます。

2017年度入試における飛び入学実施大学

| 大学名 | 実施学部 | 制度導入年度 |
|---------------|-------------|--------|
| 千葉大学(国立) | 文学部・理学部・工学部 | 1998年度 |
| 名城大学(私立) | 理工学部 | 2001年度 |
| エリザベト音楽大学(私立) | 音楽学部 | 2005年度 |
| 会津大学(公立) | コンピュータ理工学部 | 2006年度 |
| 日本体育大学(私立) | 体育学部 | 2014年度 |
| 東京藝術大学(国立) | 音楽学部 | 2016年度 |
| 京都大学(国立) | 医学部 | 2016年度 |

3 工学系分野でも横断型の学部・学科を設置へ

今年6月、文部科学省から「大学における工学系教育の在り方について(中間まとめ)」が公開され、工学系教育に向けた方針が示されました。学士・修士の6年一貫制や工学基礎教育の強化、インターシップを含めた産学共同教育体制の構築などに取り組むことが検討されています。

その大きな目的は、昨今の産業構造変化に対応できる人材教育です。AIやIoT、ロボットといった「スマート社会」に対応するために、明治時代以来の縦割りになっている学部制は見直し、横断型にすることも推奨されています。

AIやロボットをはじめとした工学系分野は、次代の経済成長の牽引役として大きな期待をされています。日本政府も技術力を海外に発信するべく、2020年の東京オリンピック・パラリンピックでは

様々なサービスや仕組みに最新技術を用いて、五輪全体を大きなショーケースにしたいという思惑も発表しています。まさに工学系教育は、現在の日本の重要課題の一つなのです。その変化の速さを鑑みても、大学での教育体制もどんどん変化していくことが考えられます。

工学系分野において横断型で実践的な学部が次々に登場することに大きな期待ができる一方で、近年文系学部で「国際」「グローバル」「地方創生」など社会的な注目ワードを冠した学部が増えているように、一見何を学べるのかが分かりにくい学部・学科が一斉に登場する可能性もあります。自身のやりたいことを見失わないために、そしてやりたいことと学部・学科のミスマッチを起さないように、今後変化を見極める姿勢が求められます。

Editor's Memo

Gno-info vol.2では、高大接続改革の要である「共通テスト」の全容をお伝えしました。そして4面でもお伝えした通り、国公立大・私大では改革を先読みした取り組みを既に個別に進めています。今後も毎年のように各大学の選考方法や教育カリキュラムに個性が出てくる可能性があり、またそれに追従して中学・高校においても積極的な変化が想定されます。大学受験生はもちろん、高校・中学を受験する学生・保護者にとっても、今後は情報収集がより大切になりそうです。